

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21H00823

研究課題名（和文）「大学における教員養成」の再構築に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）Theoretical and empirical research on the restructuring of teacher education in universities

研究代表者

鹿毛 雅治（KAGE, Masaharu）

慶應義塾大学・教職課程センター（三田）・教授

研究者番号：80245620

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、理論的および実証的アプローチを統合的に推進することを通して、大学における教員養成の理念や実態を明らかにするとともに、そのシステムの再構築に向けて、日本における教員養成の新たな高度化に向けた将来像を描き出し、具体的な提言を行うことを目指した。25名の有識者を対象としたインタビュー調査、1800名以上を対象とした質問紙調査を実施するとともに、公開シンポジウム等の研究協議の場を30回以上にわたって開催した。それらの研究成果として、今後の大学における教師教育に関する基本的な考え方と提言を「グランドデザイン」、それを具体化した提案を「モデル化」としてそれぞれまとめ文書として確定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本プロジェクトの研究成果として提示した「グランドデザイン」は、教員養成に関わるすべての高等教育機関の教員が共有すべき「基本的な考え方」及び教員養成に関わるすべての関係者が共通の基盤に立って議論ができるような「基本理念」を記したものである。また、それを踏まえて記された「モデル化」は大学における教員養成のカリキュラムと制度に関する具体的な提言である。以上は、日本教師教育学会が主体となって取り組んだ学術的成果として、また、今後の大学における教員養成の理念や具体的なカリキュラムと制度について検討する上で学術的資料として意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：Through the integrated promotion of theoretical and empirical approaches, this study aimed to clarify the philosophy and reality of teacher training at universities, and to draw up a future vision for the new advancement of teacher training in Japan and to make concrete recommendations for the reconstruction of this system. We conducted an interview survey of 25 experts and a questionnaire survey of more than 1,800 people, as well as holding more than 30 public symposia and other research discussion forums. As a result of these studies, the basic ideas and recommendations for future teacher education at universities were compiled into a 'grand design' and proposals embodying these ideas were compiled into a 'modelling' document, respectively.

研究分野：教育心理学

キーワード：教師教育 教員養成 大学教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学における教員養成については国策によって規定されてきた歴史的経緯がある。日本教師教育学会(第11期)において、その妥当性について今日的な観点から学術的基盤に基づいて検討する必要があることが提起され、課題研究プロジェクトが組織された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学における教師教育の特質について学問的な基盤に立脚して研究活動を進め、大学教育それ自体に対する理念的な考察を深めつつ、大学における教員養成の意義を問い直すとともに、教員養成、採用、研修の制度およびカリキュラムという観点から理論的、実証的な研究を行い、現状の問題点や課題を析出し、今後の大学における教師教育のあり方について具体的な提案をすること(「グランドデザイン」を描き、具体的な「モデル」を提示すること)である。

3. 研究の方法

大学における教職課程のあり方について、理論的な検討を通して、その基本的な考え方を明確化するとともに、「カリキュラム」と「制度」という二つの観点から具体化した文書を「グランドデザイン(素案)」として作成した。そして、その「グランドデザイン(素案)」に対する意見聴取を目的として、当該分野の識者、専門家に対して質的調査(インタビュー)を行い、(1)その妥当性や問題点・修正点を見出すと同時に、(2)現在進行形の「現状」に対する問題点を把握し、今後の検討に向けた留意点について検討した。その結果、「グランドデザイン(素案)」を改善し、「グランドデザイン(案)」を確定した。さらにこの「グランドデザイン(案)」の妥当性について検討することを目的として、大学で教職課程を担当する教員、教育行政担当者、現職教員、教職課程履修学生を対象とした量的調査(質問票調査)を実施し、その結果を分析、考察することを経て「グランドデザイン」を確定した。

4. 研究成果

研究成果を文書(今後の教師教育の「グランドデザイン」)にまとめた。この文書は「基本的な考え方」「提言」「提案:「グランドデザイン」のモデル化」によって構成されている。

なお、本報告では紙幅に限りがあるため、全文を掲載することができない。そこで以下では、「基本的な考え方」のみ全文を記し、それ以降の「提言」と「提案」については、文書の見出しのみを記すにとどめる。文書全文については日本教師教育学会(監修)(2024)『大学における教員養成の未来』(学文社)を参照されたい。

今後の教師教育の「グランドデザイン」

基本的な考え方

(1)「これからの教師像」をどのようなものとしてとらえるか

現在、大きな社会的変革が進む中で、学校そのものも大きく変化しています。教師は、こうした新しい学校教育において中心的な役割を担うことが期待されており、その専門性の向上がより一層求められています。また、子どもの教育を支える「公的」な職業として、その重要性はますます大きなものとなっています。こうした中で、我々はこれからの教師を「自律的でクリエイティブな高度専門職」として位置づけたいと思います。すなわち、これからの教師は「学びと成長の専門家」であり、かつ、市民性(社会的公正など)や豊かな感性(人権感覚など)を基盤とした「自ら学び考える教師」であるべきです。しかもそのような教師の専門的な力量は、同僚性や協働が重視される職場環境の下でこそ十全に発揮されます。こうした教師になるためには、教育や教科に関連する理論を「幅広く探究的に学ぶ体験」が必要であり、それは大学教育を通じてこそ実現します。そこでは教師としての即戦力そのものを重視するというよりも、以上のような教師に求められる力量のうちの基本的素養を、「探究的・研究的な学び」を通して培うことが中心になると考えます。

この実現に向けて、大学における教員養成については、「市民的教養」「教育学的教養」「教科の教養」の探究を通して望ましい力量を育成することができるカリキュラムを構築する必要があります。同時に、教員養成に携わる大学の教師にも、学生が身に付けるべき力量を念頭に置きながら、大学全体で組織的な改革に取り組み、同時に、自らの教育実践や授業の在り方を改善し続けていくことが求められます。

(2)「理論」と「実践」の関係をどのように考えるのか

専門職の養成においては、理論と実践の両面が重視されるべきです。しかし、子どもたちがいない大学における養成で実践的な力量を形成するには限界があります。また、現在、大学においては履修登録できる単位の上限を設ける制度(キャップ制)が導入され、学校教育現場で必要とされる事項を次々とカリキュラムに加えることにも限界があり、(1)で述べた、本来大学で学ぶべき基本的素養の修得が困難になりつつあります。

こうしたことから、我々は、理論的学びと実践的力量を共に身に付けた教師を養成するために、現行の4年制の学士課程の後に、多様なルートを持つ2年程度の課程(大学院修士レベル)を加えて標準とする新たな制度的枠組みを提唱します。現在、教師の職務が複雑化・高度化している現状、及び、心理系・薬学系・医学系等、他の専門職が大学院レベルまでその養成期間を延長していること、さらには、欧米諸国においては教員養成が大学院レベルまで引き上げられつつあるという国際的な動向を踏まえれば、教職を高度な専門職とするための必要な方策と考えます。この2年程度の課程(大学院修士レベル)においては、高度な専門性を獲得できる多様なルートやカリキュラムを提案したいと考えています。

(3)「質」と「量」の両方を視野に入れた制度設計をどのように行うか

教師の養成に関しては、質と量の確保を共に視野に入れた制度設計が必要と考えます。「質」に関しては、入職後の即戦力の必要性は認められるものの、基本的に、教育に関する諸学問の知や教科等に関連する専門分野の知といった「大学でこそ学ぶべきこと」や「大学でしか学べないこと」を前提とした養成制度であるべきです。なぜなら、入職後に、高度な専門職として生涯にわたって学び続ける基礎を培うことこそが、大学教育の役割だと考えるからです。

「量」に関しては、現在、教員不足が大きな問題となっていますが、教員不足を理由として大学における教師の養成を軽視することは、専門職としての教師の社会的地位を脅かすものです。質と量を両立させるためには、基本的に、教職をより魅力的な職業とするための諸施策を実施すると同時に、質を向上させながら多くの人々が教師の道を選択できる、新たな「柔軟かつ多様な制度的枠組み」を構築する必要があります。なぜならば、他の専門職と比較して、圧倒的に多くの、そして、多様な教師が必要とされているからであり、唯一の単独モデルによる養成では質と量を両立させることは不可能だと考えるからです。そのため、我々は、開放制の原則のもとで、目的養成と並立する多様な教職課程の在り方を具体的に構想しています。

そのため、質と量の両方を視野に入れた新しい制度として、上記(2)で示したような、4年制の学士課程の後に、多様なルートを持つ2年程度の課程(大学院修士レベル)を加えて標準とするような改革を提案します。言うまでもなく、教員不足が大きな問題となっている現状で、単一の6年制の養成課程のみを考えることは避けるべきです。入職後の教員の「学び直し」の機会としての大学院や、教職を志望する社会人を対象とした「学び直し」の機会としての大学院も重要なルートとして位置づけたいと考えています。その際には、十分な身分的・経済的保障も必要となりますが、それは教職の魅力を高めることにも繋がりますので、こうした施策も併せて提唱したいと考えます。

提言

1. 教職課程カリキュラムの再構築

- (1) 大学教育で育むべき教師の力量
- (2) 学士レベルを超えたさらなる学びの支援
- (3) 「大学における教員養成」の実践の改善

2. 「6年間を見通した教員養成システム」の構築

- (1) 大学院での学び直しを保障する多様なルートによる免許制度
- (2) 社会人を対象とした教員養成プログラム
- (3) 大学と現場をつなぐ「導入プロセス」の再編
- (4) 課程認定制度の限界と新たな質保証制度の提言
文科省による課程認定制度の限界
新たな質保証制度における専門学会・大学の役割

提案：「グランドデザイン」のモデル化

・はじめに

1. なぜ「モデル化」が必要か
2. 「モデル化」にあたっての基本原則

・標準免許状と基礎免許状について

・基礎免許状と学士レベルの学びについて

1. 「基礎免許状」を取得する意義
2. 二つの参照基準：「エッセンシャル・カリキュラム」
3. 学士レベルの「教職特別課程」

・標準免許状と大学院修士レベルでの学びについて

1. 「標準免許状」を取得する意義：教職経験を持つ人の場合
2. 「標準免許状」を取得する意義：教職経験を持たない人の場合

3. 三つのタイプの大学院修士課程
4. 教育臨床研究：多様性の中の「共通性」
5. 修士レベルの「教職特別課程」
6. 標準免許状と学位
7. 標準免許状の取得を促す方策

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 日暮トモ子、本柳とみ子、吉田重和、佐藤裕紀、古阪肇、鈴木賀映子	4. 巻 9
2. 論文標題 OECD「初任教員の養成に関する調査」(Initial Teacher Preparation Study)に係る各国報告書の翻訳 (抄訳)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比較・国際教育学論集	6. 最初と最後の頁 21-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川村光	4. 巻 23
2. 論文標題 教師の予期的社会化と初任期の教育実践の連続性 - 教職課程コアカリキュラム導入前の養成教育を受けた 新任小学校教師の語りへの注目 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西国際大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 59-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井真由子・越智康詞・川村光・加藤隆雄・長谷川哲也・紅林伸幸	4. 巻 45
2. 論文標題 教職大学院の現状と可能性の探究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上田女子短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鹿毛雅治、岩田康之、勝野正章
2. 発表標題 「大学における教職課程の「グランドデザイン」を描く」
3. 学会等名 日本教師教育学会第32回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩田康之
2. 発表標題 教員養成系単科大学における教員養成と教育学 東京学芸大学の組織とカリキュラムから考える
3. 学会等名 日本教師教育学会第31回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浜田博文、鹿毛雅治、牛渡淳、岩田康之、勝野正章
2. 発表標題 大学における教職課程の「グランドデザイン」
3. 学会等名 日本教師教育学会第33回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本教師教育学会	4. 発行年 2024年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 240
3. 書名 大学における教員養成の未来 - 「グランドデザイン」の提案	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伏木 久始 (FUSEGI Hisashi) (00362088)	信州大学・学術研究院教育学系・教授 (13601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	勝野 正章 (KATSUNO Masaaki) (10285512)	東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授 (12601)	
研究分担者	濱田 博文 (HAMADA Hirofumi) (20212152)	筑波大学・人間系・教授 (12102)	
研究分担者	牛渡 淳 (USHIWATA Jun) (30151856)	仙台白百合女子大学・人間学部・教授 (31309)	
研究分担者	和井田 節子 (WAIDA Setsuko) (30510804)	共栄大学・教育学部・教授 (32420)	
研究分担者	岩田 康之 (IWATA Yasuyuki) (40334461)	東京学芸大学・先端教育人材育成推進機構・教授 (12604)	
研究分担者	福島 裕敏 (FUKUSHIMA Hirotoshi) (40400121)	弘前大学・教育学部・教授 (11101)	
研究分担者	仲田 康一 (NAKATA Koichi) (40634960)	法政大学・キャリアデザイン学部・准教授 (32675)	
研究分担者	川村 光 (KAWAMURA Akira) (50452230)	関西国際大学・教育学部・教授 (34526)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	日暮 トモ子 (HIGURASHI Tomoko) (70564904)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究分担者	塩津 英樹 (SHIOZU Hideki) (70620665)	島根大学・学術研究院教育学系・准教授 (15201)	
研究分担者	樋口 直宏 (HIGUCHI Naohiro) (90287920)	筑波大学・人間系・教授 (12102)	
研究分担者	金馬 国晴 (KINMMA Kuniharu) (90367277)	横浜国立大学・教育学部・教授 (12701)	
研究分担者	山崎 奈々絵 (YAMAZAKI Nanae) (90598103)	聖徳大学・教職研究科・教授 (32517)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関